

〈学界展望〉

4～9 世紀の契丹に関する研究の現状と課題

岡 本 優 紀

は じ め に

契丹とは、4 世紀から現在のシラムレン川流域（内モンゴル自治区東部）にいた騎馬遊牧民のことであり、『魏書』に初めて登場する⁽¹⁾。『魏書』・『北史』・『隋書』によると、契丹は中原の王朝に対し、時には朝貢を行い、時には「国境」付近に侵攻して掠奪していた。その後、唐の 648（貞観 22）年に「蕃長」の窟哥が諸部を率いて唐に内属し、羈縻支配下に入ったため、『旧唐書』・『新唐書』や『資治通鑑』・『冊府元龜』などの典籍史料に契丹の動向が詳しく記録されるようになった。窟哥が率いていた八つの部は、彈汗州・峭落州・無逢州・羽凌州・日連州・徒河州・万丹州・疋黎州・赤山州などの羈縻州に置かれた。これらの羈縻州は窟哥を都督（長官）とする松漠都督府に属した。これとは別に、契丹の羈縻州には契丹の孫敖曹が部を率いて内属した際に設置された遼州や契丹の曲捩が部を率いて内属した際に設置された玄州などがある。その後、696（万歳通天元）年から 697（万歳通天 2）年にかけて松漠都督の李尽忠とその義兄の孫万荣による「乱」が起きた。それにより、契丹の松漠都督を筆頭とする八部は一時唐の羈縻支配から脱却するも、716（開元 4）年に「首領」の李失活が諸部を率いて唐に内属したため、再び羈縻体制下に入った。その後、「衙官」の可突于が起こした「乱」（740～734）を契機に、またもや契丹が羈縻支配から離脱したため、一挙に正史などの典籍史料から契丹に関する記載が減少した。加えて、河北において安祿山の「乱」が発生し、その後河北に半独立国家とも呼べる河朔三鎮が誕生したため、それが障害となり、唐の中央まで契丹の情報が伝わるのが少なくなった。それにより、8 世紀後半から 9 世紀の契丹の動向を史料上で確認することが難しくなった。このように、9 世紀までの契丹に関する従来の研究は、常に史料の量に影響され続けている。

ところで、近年、契丹の周辺諸部族に関する研究が活発に行われている。契丹の西方にいた突厥についての研究は、石刻史料の発見により飛躍的に進歩しており⁽²⁾、また、東方にいた渤海についても『冊府元龜』や『曲江集』を用いた研究が進められている⁽³⁾。さらに、耶律阿保機によって建国された契丹（遼）国の研究も大きく前進しており、契丹（遼）国の政治的動向や内政についても徐々に明らかになってきている⁽⁴⁾。

このように、契丹（遼）の研究の活発化によって、10 世紀以降の契丹については学界の注目を集めることになったが、それ以前の 9 世紀までの契丹については、上記の通り、史料に制約があるため、研究があまり進んでこなかったという状況であった。しかし、近年、契丹に関する石刻史料や書が発見されつつあること、さらに周辺諸国の研究が進んできたことから、9 世紀以前の契丹の動向および周辺諸国との関係を再度見直していく必要がある。

本稿は、このような問題関心に基づき、史料的制約のある中で進められてきた4世紀から9世紀の契丹に関する研究の成果を整理し、今後の展望を述べるものである。まずはじめに、日本における研究の紹介をし、次に中国における研究の紹介をする。この2つの章では、年代別にその研究成果を整理した。そして最後に、これら2つの研究状況をまとめ、今後どのような目的意識を持って研究をすすめていくか、またどのような立場から契丹史を見つめ直していくのか、私見を述べてみたい。

第1章 日本における研究状況

日本において、松井等 [1915]・愛宕松男 [1959]・田村実造 [1964] は、遼代を含めて4世紀から12世紀の契丹について、現地でのフィールドワークを踏まえて研究している。特に、戦前では満洲が日本の経済的経営下（事実上日本の支配下）にあったことから、積極的に研究が進められ、契丹史の研究も飛躍的に進んだ。戦後は、愛宕松男 [1959] と田村実造 [1964] が戦前のフィールドワークを踏まえて9世紀までの契丹の君長についての系譜をまとめた。その後、これまでの君長の系譜についての研究とは異なる新たな視点からの研究が行われるようになった。従来は契丹史という枠組みの中で、契丹がどのような行動をしていたのか、またどのような系譜であったのかを問題としていた。しかし、1980年代以降、契丹だけの問題ではなく、契丹をとりまく唐や周辺諸国との関係を踏まえた上で、研究が行われるようになった。それだけでなく、安祿山の研究の一部分として契丹がどのような活動をしたのか、ということも問題点として取り扱われるようになった。

上記の通り、契丹史の研究状況はおおよそ戦前（～1945年）と戦後の1980年頃までとそれ以降に分けることができる。よって、本章では1945年以前、1945～1980年、そして1980年以降の三時期に区分し、それぞれの研究状況を述べていくことにする。

第1節 1945年以前の研究

9世紀以前の契丹に関する研究に白鳥庫吉 [1912] がある。白鳥庫吉は、4～9世紀にかけて契丹の居住地がどこであったのかを論点とした。『通典』や正史を使用し、4～7世紀にかけて、契丹はラオハムレン河の上流域にいた庫莫奚（奚）の東北（現在の朝陽市の北数百里）に遊牧しており、7世紀に入ると、ラオハムレン河の下流域に移動したことを明らかにした。さらに、7～9世紀における契丹の領域について、南は朝陽市、北はシラムレン川に達し、西はラオハムレン川の東に連なる山脈に達し、東は高句麗と接していた、とした。この他にも、正史に記載されている契丹語の単語の意味をモンゴル語の音声学上から解析している。

白鳥庫吉 [1912] の研究を踏まえて、4世紀ごろの契丹の住地をさらに詳細に分析したのが、小川裕人 [1938] である。小川裕人は靺鞨系種族と契丹の間にはいたとされる諸部族がどのようなものだったのか、を問題点とした。靺鞨と契丹の間にはいたとされる諸部族について述べるには、まず契丹の住居を確定せねばならないことから、白鳥蔵吉 [1912] を参考にしつつ、契丹の住地を詳細に

検討した。その結果、4世紀はじめごろには、鮮卑と夫餘族の境界あたりが、契丹の東境であった、つまり現在の遼河と嫩江とを結ぶ一線あたりで境を接していた、とした。さらに、4世紀に存在した契丹の「古八部」⁽⁵⁾にも言及した。『魏書』巻6によると、4世紀ごろの契丹と勿吉との間には、悉萬丹部・何大何部・伏弗郁部・羽陵部・日連部・匹黎部・黎部・吐六于部があった。小川裕人はこれらの諸部を契丹と同じく各独立した国、あるいは種族である、とした。

その後、白鳥庫吉 [1912] と小川裕人 [1938] の研究を参考に4世紀から7世紀にかけて契丹の遊牧範囲を明らかにしたのが、箭内互 [1940] である。箭内互は契丹の居住地が4~7世紀にかけて、ラオハオムレン川下流→大遼河上流の東方→朝陽市→ラオハオムレン川下流と移動してきた、とした。

このような白鳥庫吉 [1912] を筆頭とした契丹の住地を特定する研究に対して、松井等 [1915] は4世紀から始まる契丹の歴史事象を一つずつ取り上げ検証した。北魏（386-534）から耶律阿保機の建国（916）にかけて、正史・『資治通鑑』・『文献通考』・『通典』・『金石萃編』・『冊府元龜』・『資治通鑑考異』・『安祿山事迹』の中から、契丹と奚に関する記事を抜き取り、年代順にならべ、その変遷および問題点を述べた⁽⁶⁾。それだけでなく、契丹・奚に関する諸国（渤海・突厥・ウイグル）が李尽忠・孫万榮の「乱」や可突于の「乱」においてどのような動きをとったのかについても述べている。非常に簡潔かつ明瞭に書かれているため、契丹の動向を知るのには今なお有用である。この論文の中では、特に安史の「乱」を境に契丹の置かれていた環境がどのように変化したのかという点と、契丹の八部がどのように展開していたのかという点を中心に、論が展開されている。前者の論点に対して、安史の「乱」前の契丹はウイグルの影響を強く受けていたとし、「乱」後は契丹の勢力が縮小し、河北において奚が勢力を拡大してきた、と述べた。さらに、後者の論点の中で『遼史』に登場する遥輦氏八部⁽⁷⁾の始祖が『旧唐書』や

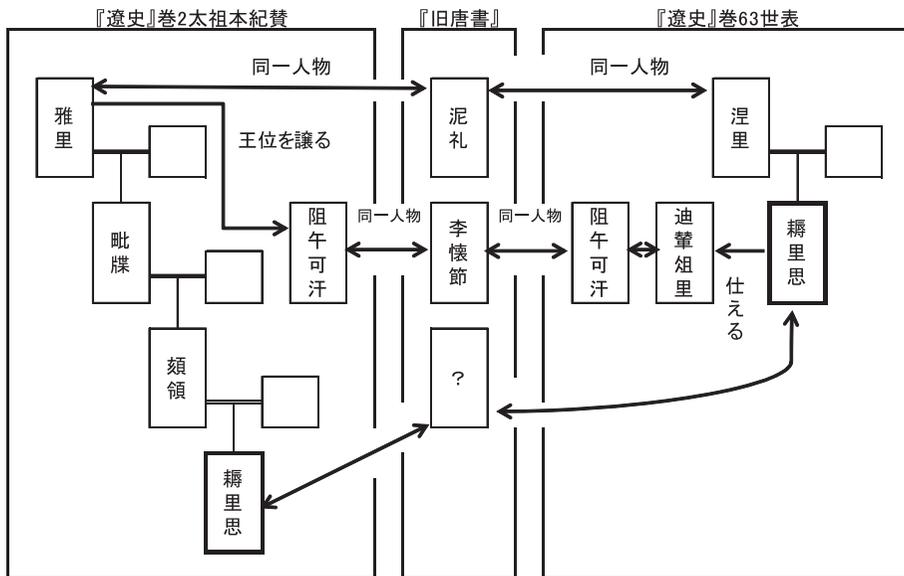


図1 『遼史』における「阻午可汗」「耨里思」に関する人物比定図

『新唐書』に登場する人物の誰に当るのかということが特に問題であるとした。『遼史』に登場する人物を『旧唐書』・『新唐書』に登場する人物に比定したまとめが、「図1『遼史』における「阻午可汗」「褥里思」に関する人物比定図」である。

『遼史』に記載されている唐代の人物が、『旧唐書』・『新唐書』の契丹伝に登場する人物の誰であるのかという問題点について、松井等〔1915〕は資料が少ないことから、遼の始祖であり遥輦氏であった阻午可汗が誰に比定されるのか全くの不明である、とした。この問題は、戦後、田村実造・愛宕松男に引き継がれることになる。

その後、神尾式春〔1937〕は、松井等〔1915〕の研究を参考としながら、7～9世紀にかけて唐の文化を吸収した部族の一つとして契丹を取り上げた。その上で、李尽忠・孫万榮の「乱」や安祿山の「乱」を通して中原に契丹人をはじめとする周辺諸民族が流入してきたことを指摘した。

このような1910～30年代における契丹の研究の現状と課題を述べたのが神尾式春〔1939〕である。神尾式春は、4～11世紀における契丹に関する研究の状況をまとめた上で、1939年に田村実造を筆頭に実施された慶陵のフィールドワークの結果を待とうとする姿勢を見せた。この論文は、戦前の契丹に関する研究を一望できるだけでなく、契丹文字や契丹（遼）国の内政といった個別事案についてもまとめられているため、戦前の契丹史を学ぶ上で、参考にすべき論文である。

以上のように1945年以前の研究では、正史を中心に様々な典籍史料を用いながら契丹の全体像を把握しようとしていた。契丹の対外関係のうち、唐との関係にも言及するが深く掘り下げることはなかった。4～11世紀にかけての契丹の動向については松井等〔1915〕に集約されている。さらに契丹の居住地については白鳥庫吉〔1912〕・小川裕人〔1938〕・箭内互〔1940〕が研究を行い、一定の成果を上げた。このような研究が行われていた背景には、日露戦争以後、日本軍が満洲を実質的に支配していたことが挙げられる。箭内互〔1940〕の雑誌の序文には、「満洲が我が国の経済的経営下に置かれたため、以前まで「未開の地」であった満洲の歴史について着手しやすくなった」ことが書かれている。さらに「世界の中で満洲の歴史の第一人者になること」、「満洲経営の上でその根幹的歴史研究を行うことが急務となっていたこと」が述べられている。さらに、この満洲におけるフィールドワークを含んだ研究には、南満洲鉄道株式会社の経済的援助があったことも明らかになった。この時に行われたフィールドワークには前述の白鳥庫吉・松井等・箭内互が参加していた。このような背景を踏まえた上で、満洲地域に関する歴史研究が急務となる中、1945年以前の契丹に関する研究は1932年以降一段と進んだのである。

第2節 1945年から～1980年の研究

戦後になると1945年以前に行われていた契丹史の研究を土台とし、さらに細かな事象（契丹の部族構成など）に論点を置いた研究が行われるようになった。それが田村実造・愛宕松男両氏による研究であった。この両氏は同時期に契丹について研究を行い、それぞれ独自の論を展開した。

まず愛宕松男〔1959〕は、松井等〔1915〕の典籍史料を用いた研究方法に、トルコ系碑文（ピルゲ・キョルテギン・トニユクク・シネウス）と元朝碑文を加えて研究を行った。さらに正史の契丹伝に登場する単語をモンゴル語音声学上から解説した。愛宕松男は、9世紀までの契丹八部（古八部・大賀氏八部^⑧・遥輦氏八部）がどのように展開していったのかを論点とした。この論点を軸としながら、君長の系譜の整理を行い、契丹八部のうち大賀氏と遥輦氏の人物が『旧唐書』・『新唐書』に登場する人物の誰であるのかについて比定を行った。そこでまず1つ目の論点を見ていく。愛宕松男は李尽忠・孫万榮の「乱」の時には、契丹には2つの集団（曰くフラトリ）があり、一つを李姓・もう一つを孫姓の集団と位置づけた。李尽忠・孫万榮の「乱」はこの2つの集団が結託したことによって1つの巨大な集団となり、大きな力を持ったために「乱」を起こすことができた、とし、この「乱」によって、それまで君長を輩出していた乙失革部が失活部に変わった、と述べた。さらに、可突于の「乱」について、可突于がその時の松漠都督である李邵固を殺害し、出身不明の屈烈を擁立したことは、648年の屈哥から続く君長系統の断絶を意味している、とした。つまり、可突于の「乱」によって、君長を輩出する新たな部が誕生したのである、と述べた。次に2つ目の論をまとめると、愛宕松男は、契丹八部について、モンゴル語音声学上の観点から、大賀氏は「唐朝への服従者」、遥輦氏は「独立者」という意味になることを解き、唐に対して「反乱」を起こした李尽忠を遥輦氏と捉えた。その後、714年に「首領」の李失活が諸部を率いて内属してきたことから、李失活を大賀氏とし、可突于の「乱」直前の松漠都督である李邵固までを大賀氏の復活と位置づけた。これに従うと、可突于是遥輦氏ということになる。さらにモンゴル語音声学上から、松井等〔1915〕が比定しなかった「阻午可汗」を可突于と共に「乱」を起こした契丹王の屈烈とし、「雅里」は可突于のことである、と説いた。

これに対して、田村実造〔1964〕は、正史をはじめとする典籍資料と『契丹国史』・『東都事略』・『五代会要』・『文献通考』・『漢高祖実録』の史料を使用して、契丹八部や、契丹族の君長の変遷を唐と契丹の関係を踏まえて論究した。田村実造は、愛宕松男〔1959〕と同じく契丹八部の存在やその時期を問題とした。小川裕人〔1938〕が契丹から独立した存在と評価した「古八部」について、田村実造は存在自体認めがたいとし、「古八部」の後に登場する大賀氏八部や遥輦氏八部について、唐代すべての「君長」の動向をまとめた上で、可突于に殺害された李邵固までを大賀氏と結論づけた。さらに、松井等が問題としていた「阻午可汗」の人物比定については、再検討を待たねばならないという姿勢をみせた。

以上のように、1945年から1980年までの日本における契丹に関する研究は、田村実造・愛宕松男によって契丹国（遼）成立以前の王族（契丹八部）の検討が行われた。この両氏の研究は、松井等の研究を批判的に継承しながらも、愛宕松男はモンゴル語音声学上から、田村実造は既存の典籍史料からのアプローチによって、それぞれ見解を異にした。

第3節 1980年以降の研究

1980年以降になると、松井等から愛宕松男・田村実造にかけて行われてきた契丹八部や「阻午可汗」などの人物比定を論点とする研究とは異なる、新たな観点からの研究が登場した。

金子修一〔1985〕は、『曲江集』に収用されている賀状や書（「勅契丹王拋埒・可突于等書」「勅契丹王拋埒及衙官可突于・蜀活刺史鬱捷等」「勅契丹都督涅礼書」「賀破突厥状」「勅幽州節度張守珪書」「勅奚都督李帰国書」「勅突厥可汗書」「与契丹王鵠戍書」）を使用して、唐から授与される「郡王」号にいくつかの種類があることを明らかにした。金子修一によると、中国王朝が周辺諸国に授与する王号には、諸国において君長が王位を継承した際に中国王朝がそれを承認するときに贈られた「本国王」と、王位の継承に関係なく授与する儀礼的な王号とがあることを指摘し、後者が中国王朝の徳に浴したことを意味することから「徳化王」と名付けた。これらを元に、契丹の「郡王」号についてみると、唐と内属的な関係から脱して独立的な状態にあるときに「王」という称号が用いられた。それとは別に、徳化王は特に褒封を必要とする場合にその都度与えられていたことが明らかになった。この「郡王」号の研究は、冊封体制論の研究の一部である。

森部豊〔2011〕は新たなフィールドワークで獲得した墓誌史料を使用し、安祿山の仮父子関係について論じた。研究の結果、安祿山の娘婿が可突于の「乱」の最中に唐に投降した奚人である李詩の息子であったことを述べた。森部豊はこの奚の李詩が唐朝に内属したときに引き連れていたグループの中にいた李宝臣が安祿山と仮父子関係をむすぶこと、さらに李詩が率いていた5000帳の中には契丹の怒皆部も含まれていたことを述べた。上記の森部豊の研究によって、安祿山の仮父子関係の成立の背景には可突于の「乱」があったことが明らかになった。安祿山の登場以降、河北は安祿山の「乱」によって壊滅的な被害を受け、その後、半独立国家ともいえる河朔三鎮が誕生する。補足になるが、新見まどか〔2012〕は、この河朔三鎮のうち、安祿山の「血統」の継承者という正統性を保持した成徳節度使の李宝臣が河朔三鎮の中心的人物であったことを明らかにした。これらの研究により、可突于の「乱」において発生した奚人の唐への流入が、安祿山を経て河朔三鎮にまでつながることが明らかになった。

その後、速水大〔2014〕は、李小龍〔2010〕によって『永樂大典』の中から発見された『曲江集』の佚文「勅幽州節度張守珪書」と「勅幽州節度副大使幽州長使兼御史中丞張守珪等書」を参考に、両敕書に関係する可突于の「乱」の史料を整理した。速水大は、正史や『曲江集』に記載されている勅書の他に「劉玄尚墓誌」や「李永定墓誌」「張守珪墓誌」を使用し、可突于の「乱」の動向を細かく検証した。その結果、樊衡「為幽州長史薛蘇玉破契丹露布」が開元21年に発給されたものであると特定した。さらに、734年、契丹の「衙官」である李過折によって屈烈と可突于が殺害され、「乱」が平定したことは、唐朝にとって東北方面の安定を意識させる決定的な要因であったと述べ、可突于の「乱」の規模が従来の見解よりも大きな事件としてとらえるべきである、と歴史的評価を加えた。

第2章 中国における研究状況

中国では4～9世紀の契丹に関する研究が蓄積されており、その中でも特に注目すべき論文を取り上げて紹介していく。便宜上、日本の研究状況の節分け（1980年以前と以後）と連動して、

中国における研究状況を取り上げる。

第1節 1980年以前の研究

華山 [1958] は、『新唐書』『遼史』を使用して、耶律阿保機登場以前の契丹の経済を主軸に論を展開した。契丹の経済的發展について、フリードリヒ・エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』(1884年)における民族の国家の發展過程を参考に、契丹の社会がどのレベルであるのかについて定義した。この方法は、後述する孫進己 [1981・1983] も継承している。また、華山は論文の中で、契丹の大賀氏については、一定のグループを率いていた「大辱紇主」あるいは「大紇主」の意識であると定義した。

4～9世紀の契丹の経済状況と契丹の組織がどのように發展を遂げたのかに関する著作に陳述 [1963] がある。陳述は、4世紀ごろから契丹人が毛皮や馬を中原王朝の人々と交換していたことを指摘した。さらに7世紀に入ると、契丹の李尽忠・孫万榮の「乱」において李尽忠が自らのことを「無上可汗」と称したことから、この時点で契丹が組織化していたと捉えることができる、とした。

この研究を批判的に継承した孫進己 [1981・1983] は、典籍史料を使用し、契丹八部の変遷および契丹の發展過程について論究した。孫進己は従来の契丹八部を整理した結果、古八部の悉萬丹部・何大何部・伏弗郁部・羽陵部・日連部・匹部・黎部・吐六于部のうち匹部・黎部を1つの部とみなし、その代わりに契丹部が存在した、と説いた。さらに、大賀氏八部についても、この八部とは別に曲据部・内稽部・孫敖曹の部・松漠部があったため、唐の前半期には契丹に12の部があった、とした。さらに唐の後半期になると、唐前半期に高句麗と突厥からそれぞれ契丹に内属した2つの部があり、遥輦氏八部と合わせて10の部が存在していた、とした。この孫進己の研究は、唐の内地に設置された部(羈縻州が設置された部)も契丹の主要な部として含まれている。契丹には、松漠都督が率いる騎馬遊牧民としての部の体制を保持する部と、唐の内地に設置され唐の制度の中に組み込まれた部が存在する。孫進己はこれら2つの部を混在して研究していることから、孫進己の研究成果に対して慎重に検討する余地がある。また、孫進己は契丹(遼)の建国以前の契丹について、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』を参考に、3つの段階に分けることができる、と説いた。まずは4～6世紀を一つの区切りとした。この時期は、小規模な家庭(正史に登場する「戸」や「家」)が形成されたこと、また交易が発達していたこと、さらに契丹の諸部の間で連合が形成されつつあったことから、「野蛮中期」である、とした。次に6～7世紀を一つの区切りとした。この間に諸部間に連合が完成したことに加え、奴隸が誕生したことから、この時期を「野蛮後期」と名付けた。最後に8～9世紀を1つの区切りとした。その根拠に、河北において契丹の掠奪が頻繁に行われたこと、刑法や城邑が存在し契丹独自の官職が設置されていたことを挙げ、この時期を「早期国家」である、と位置づけた。

上記の契丹に関する研究に対して、4～9世紀の契丹史について概略的にまとめたのは、張正明 [1979] である。張正明は典籍史料を整理し、その中で契丹に関する記事を抜き取り紹介している。この論文は、その後の契丹(遼)の前段階として捉えた研究であったため、その前である

4～9世紀の契丹について概説的になっている。

第2節 1980年以降の研究

1980年代以降、中国においても契丹と唐の関係を紐解くことによって契丹の動向やその特徴を明らかにしようとする研究が行われるようになった。黄永年〔1998〕は、李尽忠・孫万栄の「乱」において契丹が営州を陥落することができた背景に、唐の府兵制の崩壊があるとした。この時の府兵制では、唐の中央から行軍が派遣される形であった。加えて期限付きの兵士による行軍の編成は十分な戦闘能力を備えていなかったことから、孫万栄は河北まで侵攻することができたとした。その後、募兵制が施行されたため、可突于の「乱」においては唐がその「反乱」を優勢的に抑えることができたとした。さらに、安禄山の軍を検討する中で、その軍の主たる勢力をソグド人であるとする陳寅恪〔1943〕の説に対して、正史や『安禄山事跡』に記載のある安禄山の腹心の出自や幽州における契丹・奚の羈縻州を整理した結果、契丹と奚が主要な勢力であった、と説いた。

また、任愛君〔2007・2008〕は、7～8世紀の幽州（現在の北京市）における契丹の諸部の動向に着目した。主に正史を中心とする典籍史料を用いて論を展開しているが、9～10世紀の出来事に関しては墓誌史料を活用している。諸部の変遷を明らかにするために、営州（現在の朝陽市）・幽州に設置されていた契丹の羈縻府州の変遷やその特徴に注目した。その結果、任愛君は、648年に李窟哥が諸部を率いて唐に内属した時に、諸部に設置された羈縻府州について、二種類に分類できるとした。一つは唐からの影響を強く受けたもの、もう一つは唐からの影響が少なかったものである。前者の羈縻州は、営州都督府の管轄下にあったものであり、李尽忠・孫万栄の「乱」の際に、幽州都督府の管轄下に変更されると同時に、その治所を南に移動させて、羈縻州どうしが関係をもたないようにさせていた。その一方で、後者は松漠都督府に附属し、部の組織を完全に残した状態を保ったままであった。任愛君は羈縻府州の特徴だけでなく、李尽忠・孫万栄の「乱」と可突于の「乱」の目的が唐に完全に帰属した羈縻州（ここでは前者の羈縻州）の奪還であったことを明らかにした。だからこそ、李尽忠・孫万栄の「乱」では幽州を攻撃したが、目的とする契丹の羈縻州がそれより南に移動していたため、さらに南の趙州（河北省石家荘市趙県）まで侵攻したのである、と説いた。しかし、李尽忠・孫万栄の「乱」はその羈縻州を奪還できずに終わった。可突于の「乱」も同様に羈縻州の奪還を目的とした、としているが、可突于の「乱」は李尽忠・孫万栄の「乱」と比較して「乱」の侵攻地の範囲が狭いことから、可突于の「乱」の目的は達成されずに終わったとの見解を示した。さらに任愛君は、安禄山の「乱」以降の契丹について、契丹と境を接していた盧龍節度使に注目した。その結果、盧龍節度使の劉仁恭が組織した「銀胡鞞」という軍隊について、その長官が契丹人であり、五代の「契丹銀鞍直」の前身である、と説いた。以上、任愛君は、契丹の羈縻府州の変遷やその特徴から、李尽忠・孫万栄の「乱」と可突于の「乱」の目的が、羈縻府州の奪還である、と説いた。しかし、以上の見解に対して、いくつかの問題点が生じる。それは、彈汗州という羈縻州の分類である。彈汗州は、648年に契丹の析紇便部に設置され、松漠都督府下に設置された。しかし、その後716年、742年、758

年と名称を変え、松漠都督府下から順州（営州の南方の柳城）の北方に治所を置くようになった。このような羈縻州について、任愛君の説でいうならば、初めは唐からの影響の少ない羈縻州であった弾汗州が、李尽忠・孫万荣の「乱」を通して、契丹の松漠都督府から唐に治所を置き直していることになる。任愛君は、2つに分類した羈縻府州について相互に関係を持たせないようにしていた、とあるが、弾汗州のように、2種類の羈縻州を兼ねている場合があることが判明した。そのため、任愛君による2つの羈縻府州の分類については再度考察を加える必要があるだろう。

7～9世紀にかけての契丹の「乱」の目的を明らかにした任愛君に対し、730～734年にかけて「乱」を起こした可突于について注目したのが李大龍〔2012・2013〕であった。李大龍は、典籍史料を用いて可突于の肩書きである「衙官」とは何かを論点とした。その結果、衙官は、唐から松漠都督府に設置された静析軍の副使と同じ意味を持ち、君長と同等の軍事力を持っており、唐の「辺境」地区の軍に設置されていた官員である、と述べた。静析軍副使の設置の背景には、唐が契丹の軍隊である静析軍を二分して松漠都督と衙官に統率させることによって、松漠都督に軍事力が集中するのを防ぐ役割があった、とした。つまり、李大龍によれば、契丹の李失活が716年に唐に内属してから、可突于是君長と軍事力を二分していたが、掌握する軍事力が徐々に高まっていき、次第に君長を脅かす存在となり、「乱」を起こすに至ったのである、とした。李大龍の研究は、可突于自身に注目した研究として注目すべきであるが、いくつかの問題点が残る。それは「衙官」という名称がウイグルや突厥、奚、渤海などに見られることである。これらの諸部族には、契丹のように軍が設置されたという記載が典籍史料にない場合がある。そうになると、衙官を静析軍の副使と同等であると決めつけることはできないのではないかと。静析軍についての記載は、管見のかぎり典籍史料にしかなく、これ以上論を展開させることはできないため、新出の史料を待たねばならないであろう。

第3章 現在の契丹に関する研究の状況と今後の展望

以上、4世紀から9世紀における契丹に関する研究をまとめてみると、当該時期の契丹に関する史料はたいへん少なく、新しい史料の発見がないと、研究をすすめることが難しいことが浮かび上がってくる。ただ、7～8世紀にかけての契丹は唐の羈縻支配下に置かれており、さらに李尽忠・孫万荣の「乱」と可突于の「乱」が発生したため、4世紀から9世紀における契丹史の中では比較的史料が豊富である。よって、この時期を中心に契丹に関する研究が進められているのは当然のことである。

今後の契丹に関する研究をどのような側面から行うのか、という点について、まずは新たな史料を活用することが前提となろう。1990年代以降『隋唐五代墓誌匯編』や『唐代墓誌彙編』・『唐代墓誌彙編続集』・『新中国出土墓誌河北（壺）』が刊行され、さらに録文では『全唐文補遺』や『全唐文新編』などが刊行された。それによると、7～8世紀前半にかけての契丹の羈縻府州である松漠都督府が治所を置いた営州や李尽忠・孫万荣の「乱」後に羈縻州の新たな治所となった幽州についての史料が上記の資料の中に散見している。8～9世紀にかけての契丹についても、

墓誌史料の活用、および契丹と接していた盧龍節度使の動向について典籍史料をまとめていくことによって契丹の動向の一部分でも明らかにできるのではなからうか。

また、契丹と唐の関係という側面からではなく、もっと大きな枠組みで契丹を捉え直すことも必要ではないか。なぜなら、契丹は西に突厥・ウイグル、南に唐、東に渤海や高句麗といった大国に囲まれていたからである。これらの周辺諸国と契丹とは関係がなかったわけではなく、李尽忠・孫万榮の「乱」では唐に「反旗を翻した」一方で、この「乱」に乗じて渤海建国者である大祚榮らは營州から東方に逃れ、現在の吉林省敦化で振国を建国した(698)。さらに赤羽日匡由[2013]によると、「朝鮮史料の崔致遠「謝不許北国居上表」(『東文選』巻33, p.85, 太学社, 1975年)に、この時の状況を渤海が「始め契丹とともに悪をなし、ついで突厥と通牒⁽⁹⁾」したと伝え、両者の連繫を記していることから、契丹を主とし、渤海を従とし、両国は一致して唐に反旗を翻した」とある。このように渤海と連繫する一方で、この「乱」の最中、契丹は突厥に使者を派遣し内通しようと試みている⁽¹⁰⁾。また、可突于の「乱」では、契丹の西にいた突厥、東にいた渤海、さらに奚の四蕃の衆を集め、唐軍と交戦している⁽¹¹⁾。さらに、森安孝夫[2007]は敦煌出土チベット語文書(パリ国立図書館所蔵 P.T.1283)によって、安祿山の「乱」以降、ウイグルに従属した契丹はカガンと称する君主を戴いて、漠北のウイグルと「あるときは戦い、あるときは和親した」という。契丹とウイグルの関係は、安祿山の「乱」以前の714年にみることができる。李尽忠・孫万榮の「乱」後、突厥に内属していた契丹は、李失活の代になると、ウイグルの伊健啜とともに唐に投降したのである⁽¹²⁾。

このように契丹の動向を唐代史の視点からだけで考察するだけでなく、周辺諸部族の関係を踏まえて捉えなおすこともできる。つまり、契丹を遊牧世界という視点から見直すことで、新たな一側面を見いだせるのではなからうか。

おわりに

以上、契丹についての研究をまとめると、戦前の日本では契丹の基礎的研究が構築され、その後、その基盤を元に契丹の八部や諸部の展開・唐の羈縻政策下における契丹・安祿山の「乱」における契丹の動向をテーマとし、検証が行われた。従来の典籍史料を使用したこのような研究は、1980年ごろで頭打ちとなり、近年では、発見された新資料の発見や石刻史料が活用されるようになった。また、契丹の周辺諸国の研究が活発になったため、契丹の動向についても従来の典籍史料で得た情報を再度見直す傾向にある。このような研究環境の変化に伴って、契丹についての研究の論点が細分化されてきている。

契丹に関する研究を行う上で、近年の研究方法である墓誌や書などの新出史料を継続的に探し出していくことが必須である。さらに、従来の契丹と唐の関係という側面からだけでなく、契丹が、突厥・渤海・高句麗・唐に囲まれていたという地理的条件を考慮すれば、契丹を遊牧世界の一部族として捉えるべきであり、さらに契丹史についても従来とは異なる遊牧的側面から明らかにしていく必要がある。

注

- (1) 『魏書』 卷 100 契丹伝に詳しい。
- (2) 鈴木宏節 [2003・2005・2006・2008 a・2008 b・2010・2011]・齊藤茂雄 [2013]
- (3) 古畑徹 [1988・2007]・赤羽目匡由 [2013]
- (4) 契丹(遼)建国以前については森安孝夫 [1982]、契丹(遼)建国以降については武田和哉 [1994]・毛利英介 [2006・2013・2014]・荒川慎太郎 [2013]
- (5) 『魏書』 卷 100 契丹伝 (p.2223, 中華書局版)

悉万丹部・何大何部・伏弗郁部・羽陵部・日連部・匹黎部・黎部・吐六于部など、それぞれその上等な馬や文様の入った獸皮を天子の倉庫に入れて献上し、そして常にすることを求めた。

悉万丹部・何大何部・伏弗郁部・羽陵部・日連部・匹黎部・黎部・吐六于部等、各以其名馬文皮入献天府、遂求為常。
- (6) 契丹と奚をまとめて取り上げる理由は、以下の史料による。

『新唐書』 卷 219 奚伝 (p.6174, 中華書局版)

万歳通天中 (696-697)、契丹が叛き、奚もまた叛き、突厥とそれぞれ前後し、「兩蕃」と命名した。

万歳通天中、契丹反、奚亦叛、与突厥相表裏、号「兩蕃」。
- (7) 『遼史』 卷 32, 宮衛志 (pp.379-380, 中華書局版)

遙輦氏八部。且利皆部。乙室活部。實活部。納尾部。頻沒部。納会難部。集解部。奚嗚部。

唐の開元・天宝年間の時、大賀初はすでに衰えはじめ、遼の始祖の涅里は迪輦祖里を擁立して阻午可汗とした。そのとき契丹の万栄が敗れたため、部落は散り散りになったため、部族の人々を分けて八部とした。

遙輦氏八部。且利皆部。乙室活部。實活部。納尾部。頻沒部。納会難部。集解部。奚嗚部。

當唐開元・天寶間、大賀氏既微、遼始祖涅里立迪輦祖里為阻午可汗。時契丹因万栄之敗、部落凋散、即故有族衆分為八部。
- (8) 大賀氏八部は、窟哥が率いていた八つの部のことを指す。
- (9) 黒水始契丹濟悉、旋於突厥通牒。
- (10) 『資治通鑑』 卷 206, 唐紀 22, 則天武后神功元年条 (p.6647, 2011 年中華書局版)。

孫万栄の王孝傑を破ると、柳城の西北四百里に地勢の険しい場所に城を築き、その老人や婦女を留め、武器や資財を獲得したものは、妹夫である乙冤羽に守らせ、(自らは) 精兵を引き連れて幽州に侵略した。突厥の默啜がその後ろを襲うのではないかと懼れ、五人を派遣して黒沙に行かせ、默啜に語っていうには、「私はすでに王孝傑の百万の衆を破り、唐人は恐怖に陥っているから、可汗とともに勝ちに乗じて幽州を取ろうではないか。」と。三人が先に(突厥に) 到着し、默啜は喜んで、緋袍を賜った。二人が後で到着すると、默啜はその遅れたことに怒り、まさに殺そうとしたとき、二人は「一つだけ言って死なせてくれ。」と言った。默啜はなぜかと問うと、二人は契丹の実情を告げた。默啜はそこで前に到着した三人を殺して二人に緋を賜い、道案内とさせ、兵を出動し契丹の新城を取り、獲得した涼州都督許欽明を殺し天に祭った。新城を囲むこと三日間、これに勝ち、ほとんどを俘虜にして帰った。乙冤羽を派遣して万栄に報告させた。

万栄之破王孝傑也、於柳城西北四百里依險築城、留其老弱婦女、所獲器仗資財、使妹夫乙冤羽守之、引精兵寇幽州。恐突厥默啜襲其後、遣五人至黒沙、語默啜曰「我已破王孝傑百万之衆、唐人破膽、請与可汗乘勝共取幽州。」三人先至、默啜喜、賜以緋袍。二人後至、默啜怒其稽緩、將殺之、二人曰「請一言而死。」默啜問其故、二人以契丹之情告。默啜乃殺前三人而賜二人緋、使為鄉導、發兵取契丹新城、殺所獲涼州都督許欽明以祭天。圍新城三日、克之、尽俘以歸。使乙冤羽馳報万栄。
- (11) 樊衡「為幽州長子薛楚玉破契丹露布」『文苑英華』 卷 647 (p.3331, 中華書局版)。
- (12) 『新唐書』 卷 219, 契丹伝, (p.6170, 中華書局版)。

開元二(714)年,(李)尽忠の従父弟の都督(李)失活は默啜の政が衰えたため,部落を率いてイルテベルの伊健啜と来朝し,玄宗は丹書・鉄券を賜った。

開元二年,尽忠従父弟都督失活以默啜政衰,率部落与頡利發伊健啜来帰,玄宗賜丹書・鉄券。

文献一覧

日文(五十音順)

- 荒川慎太郎・赤羽目匡由等 2013:『契丹[遼]10~12世紀の東部ユーラシア』,勉誠出版。
- 小川裕人 1938:「魏初に於ける契丹勿吉間の諸部族に就いて」『史林』第23巻第1号, pp.134-152。
- 愛宕松男 1959:『契丹の古代史研究』,東洋史研究会。
- 金子修一 1992:「中国皇帝と周辺諸国の秩序」『新版古代の日本』巻2「アジアからみた古代日本」,角川書店, pp.395-419。(再録:1992『隋唐の国際秩序と東アジア』,名著刊行会, pp.35-72。)
- 神尾式春 1937:「唐代長安文化と契丹文化」『満蒙』18年5月号, pp.29-79。
- 神尾式春 1939:「相金契丹史学界の展望」『満蒙』20年9月号, pp.28-33。
- 齊藤茂雄 2013:「突厥第二可汗国の内部対立:古チベット語文書(P.t.1283)にみえるブグ Chor(‘Bug-chor)を手がかりに」『史学雑誌』第122巻第9号, pp.1542-1568。
- 白鳥庫吉 1912:「東胡民族考(第十一回)」『史学雑誌』第23編第11号, pp.1-17。
- 鈴木宏節 2003:「トニユクク碑文研究史概論」『シルクロードと世界史』(大阪大学21世紀COEプログラム2002・2003年度報告書),大阪大学大学院文学研究科, pp.113-130。
- 鈴木宏節 2005:「突厥阿史那思摩系統考-突厥第一可汗国の可汗系統と唐代オールドスの突厥集団」『東洋学報』第87巻第1号, pp.37-68
- 鈴木宏節 2006:「三十姓突厥の出現-突厥第二可汗国をめぐる北アジア情勢-」『史学雑誌』第115巻第10号, pp.1-36。
- 鈴木宏節 2008 a:「突厥可汗国の建国と王統観」『東方学』第115輯, pp.141-157。
- 鈴木宏節 2008 b:「突厥トニユクク碑文笥記:斥侯か逃亡者か」『待兼山論叢』史学篇第42号, pp.55-80。
- 鈴木宏節 2011:「唐代漠南における突厥可汗国の復興と展開」『東洋史研究』第70巻第1号, pp.35-66。
- 箭内互 1940:「第五編 南北朝時代の満洲」『満洲歴史地理』第1巻,丸善株式会社, pp.287-351。
- 武田和哉 1994:「遼朝の蕭姓と国舅族の構造」『立命館文学』第537号, pp.979-1006。
- 田村實造 1964:『中国征服王朝の研究 上』,東洋史研究会。
- 新見まどか 2012:「唐代後半期における「華北東部藩鎮連合体」」『東方学』第123輯, pp.20-35。
- 速水大 2014:「開元22年の唐と契丹」『明大アジア史論集』第18号, pp.189-206。
- 古畑徹 1988:「張九齡作「勅渤海王大武芸書」第一首の作成年時について-「大門芸の亡命年時について」補遺-」『集刊東洋学』第59号, pp.102-113。
- 古畑徹 2007:「唐代「首領」語義考-中国正史の用例を中心に-」『東北大学東洋史論集』第11号, pp.23-53。
- 松井等 1915:「契丹勃興史」『満鮮地理歴史研究報告』第1号, pp.137-294。
- 村井恭子 2003:「押蕃使の設置について」『東洋学報』第84巻第4号, pp.421-452。
- 毛利英介 2006:「澶淵の盟の歴史的背景-雲中の会盟から澶淵の盟へ-」『史林』第89巻3号, pp.75-105。
- 毛利英介 2013:「冊封する皇帝と冊封される皇帝-契丹(遼)皇帝と北漢皇帝の事例から-」『関西大学東西学術研究所紀要』第46輯, pp.213-228。
- 毛利英介 2014:「契丹令史蔡志順」『関西大学東西学術研究所紀要』第47輯, pp.293-317。
- 森部豊 2011:「安禄山女婿李献誠考」『関西大学東西学術研究所創立六十周年記念論文集』,関西大学出版部, pp.245-269。

- 森安孝夫 1982：「渤海から契丹へー征服王朝の成立ー」『東アジア世界における日本古代史講座 第7巻』，学生社，pp.71-96。
- 森安孝夫 2007：「敦煌出土ペリオ＝チベット語文書 1283 番」『シルクロードと唐帝国』，講談社，pp.316-334。

中文（ピンイン順）

- 陳述 1963：『契丹社会經濟史稿』，北京市，三連書店。
- 陳寅恪 1943：『唐代政治史述論稿』，上海，商務印書館→上海，上海古籍出版社，1982，pp.25-49。
- 華山・費国慶 1958：「阿保機建国前契丹社会試探」『文史哲』，1958 年第 6 期，pp.46-53
- 黄永年 1998：『唐代史事考釈』，台北市，聯經出版事業公司。
- 李大龍・劉海霞 2012：「唐代契丹の衙官」『中国辺疆史地研究』2012-3，pp.92-101。
- 李大龍 2013：「唐代契丹の衙官」『遼金史論集』第 13 輯，中国社会科学出版社，pp.122-136。
- 李小龍 2010：「『永樂大典』所収張九齡佚文考」『勵耘學刊』文学卷，2010 年第 2 期。
- 任愛君 2007：「唐朝与契丹部落發展的歷史關係－兼談大賀氏家族的衰微和契丹部落發展的趨向」『蒙古史研究』2007-9，pp.1-19。
- 任愛君 2008：「唐代契丹羈縻制度与“幽州契丹”的形成」『中国辺疆史地研究』2008-1，pp.8-17。
- 孫進己 1981：「契丹部落組織發展变化初探」『社会科学輯刊』，1981 年第 4 期，pp.93-97。
- 孫進己・白新華 1983：「四至十世紀契丹社会的發展」『黑龍江文物叢刊』，1983 年第 3 期，pp.67-70。
- 張正明 1979：「第一章 原始公社時期（四至九世紀）的契丹」『契丹史略』，中華書局，pp.1-21。

（関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程）